

ばんえい競馬の始まり

ばんえい競馬のルーツは、お祭りばん馬。北海道の開拓で苦楽をともにした自慢の馬に、力比べをさせたのが始まりでした。

農村の娯楽として生まれた馬の祭典「お祭りばん馬」

「ばんえい」を漢字で書くと「輓曳」。「輓」も「曳」も荷物などをひくことを意味します。北海道の開拓において重い荷をひき、農耕や木材運搬などを支えたのは、馬たちでした。こうした馬たちは、人を乗せる「乗り馬」に対し、「輓き馬」「輓馬(ばんば)」と呼ばれ、これが「ばんえい」という言葉の由来になったと言われています。

ばん馬を競わせるばんえい競走は、北海道で厳しい生活を営む農民たちの娯楽として誕生しました。二頭の馬をつなぎ、綱引きのようにひっぱり合って力比べをさせたのが始まりです。やがて荷馬車の車輪を歯止めして動かないようにし、人を何人乗せてひいたか、力を競い合ったり、馬の値段を決めたりするようになりました。現在のように、その上に重いものを載せてひかせるようになったのは明治時代の終わり頃から。農村のお祭りとして「お祭りばん馬」が定着し、日頃の労働をねぎらい、家族で楽しめる数少ない娯楽として親しまれるようになりました。

戦後の復興政策として発展した「ばんえい」

ばんえい競走は馬産が盛んな青森県でも行われていましたが、こちらは人がそりに乗らずに馬の口を取り、ひいたり追ったりするスタイル。騎手がそりに乗って馬を操るのは北海道独自のものです。これは開拓の歴史の中で農業技術を伝達した外国人指導者たちが、馬を一人で操るようにと教えた技術が受け継がれていると言われています。

農村の娯楽に過ぎなかったばんえい競走が、馬券を発行する競馬として認められるようになった

のは戦後まもなくのこと。昭和二十一年(一九四六年)に公布された地方競馬法施行規則第九条で「競馬の種類は駆歩、速歩、障害、ばんえいの四種とする」と定められたのがきっかけでした。

この時、ばんえいが競馬法の中に組み込まれたのは「産業用役馬の能力増進」「馬産の奨励」、そして「食糧増産」のためでもありました。前年の敗戦によって日本は混乱の中にあり、人々は食糧難にあえいでいました。そこへ軍人

や大陸からの引揚者が続々と帰還し、ますます食べるものが不足しました。この食糧不足解消に期待されたのが、ばんえい競馬だったのです。

馬は農地を耕し、馬ふんは肥料となつて地力を高めます。その馬が軍馬として徴用されて激減していた当時、まず馬を増やし、優良な産業用馬を育てることが急務でした。地方競馬が開催されれば、新たな馬の需要が生じます。戦時中は軍馬生産に心血を注ぎ、終戦とともに目標を失っていた馬産農家にとって、ばんえい競馬の開催は希望の光となったのです。

こうして昭和二十二年、初の公式ばんえい競走が旭川と岩見沢で各二日間、行われました。当時はまだ公営ではなく、主催は北海道馬匹組合連合会でしたが、世界でも類を見ない「ばんえい」が、競馬ファンの前に初めて登場したのです。

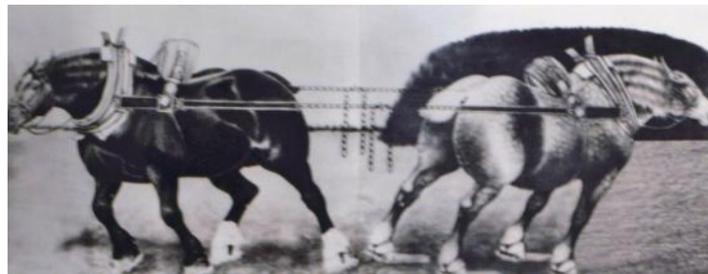
もっとも、ふたを開けてみれば、売上げは今ひとつ。前途多難な幕開けでした。ですが、同様に公式ばんえいを始めた青森県では、三年間の短命で廃止されてしまったため、以後、ばんえい競馬は北海道の独壇場となっていくのです。



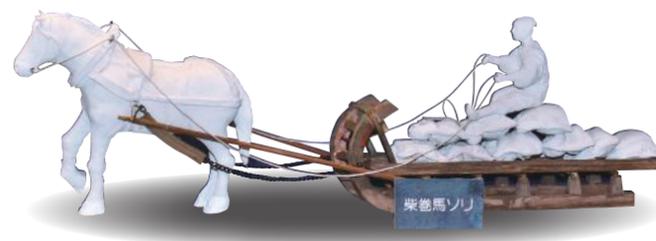
かつては道内各地で開かれていたお祭りばん馬や草ばん馬大会。(写真/長澤和恵)



丸太を切り出す作業場では、1本の丸太を2頭の馬が引き合う「ケツ引き」競技が余興として行われた。(写真/馬の資料館)



馬の力比べを描いた墨絵。(馬の資料館蔵)



ばんえいのルーツである馬そりは、木材や、生活に欠かすことのできない日用品の運搬に使われていた。(模型/馬の資料館)

ばんえい競馬のバイブル『ばんえいまんがどくほん』



●ばんえい競馬馬主協会「ばんえいの歴史資料」
URL : <http://banei-owners.jp/>

昭和53年に北海道市宮競馬協議会より刊行された『ばんえいまんがどくほん』は、同会初代事務局長であり、ばんえい競馬の基礎づくりに尽力した故・内田靖夫氏が著した、ばんえいファン必読の書。漫画家・岡本一平(画家・岡本太郎の父)に師事した経歴をもつ内田氏は、馬の特徴をとらえた愛嬌のある挿絵とともに、ばんえい競馬のなりたちや変遷、競技としてのばんえいの面白さを生き生きと伝えていきます。ばんえい草創期を知る貴重な資料でもあり、本稿も同書の一部を参考にさせていただきました。

原書は帯広市図書館に所蔵されているほか、ばんえい競馬馬主協会ホームページからPDF版をダウンロードできます。